

## 身体の中の混沌とした世界へ：ゴーレムからロボット、そして回帰<sup>1</sup> ブリス・グリュエ

意識の源と本質は何だろうか？ 生きて血の通った、生身の人間だけが享受出来るものなのだろうか？ 物質を超越したところに何かがあるのではないだろうか、物質の上に跡を残しながら同時にそれを越えてしまえる何か？ 最後に、死は存在に対する絶対的な制限なのだろうか、それとも存在のあり方の単なる変形なのだろうか？ これらの——壮大とも言える——質問に対して、押井守は孔子や旧約聖書の詩編や、または仏陀本人の言葉を介しながら我々に考察材料を与えている。そうすることで、彼は映画の争点を単に哲学的な見地に留めず、形而上的な、もしくは霊的な見地にまで広げている。このアプローチの仕方が、従来の理性的で科学的な哲学的アプローチの前後を跨ぎながら、その従来のアプローチを越えるものなのだと言外に匂わせておく<sup>2</sup>。

こうして映画は驚くほど質の高いグラフィックを介しながら、恐ろしく複雑に絡み合ったシチュエーションを次々と展開させていく。そこではマシーンと人間、人工と天然、物質と非物質の境界線がだんだん分からなくなっていく。境界がぼやけていくことに、登場人物の記憶、感情、行動が影響されていき、ついに終局を迎えた混乱の中、ひとくりに現実とは何か、と問われる<sup>3</sup>。こうなると我々のもとに確実と言えるような何が残るのだろうか？ 何もない、と監督は断言する。なぜなら、人間そのものが自分の創造物に「越される」傾向を見せているのだから。それでも、この近代テクノロジー社会の「現実」も、結局は「ゴースト」(*ghost*, オリジナル日本語バージョンでも英語読み)と呼ばれる存在の、ほぼ超自然的な作用によって完全に覆される。ゴースト、それは映画の幾つかのキーシーンで示唆される謎めいた存在で、これについては後にまた取り上げる。<sup>4</sup>

---

<sup>1</sup>このタイトルは、恐らく少々謎めいているが、押井守の映画『イノセンス』(*Innocence*)に出てくるいくつかの存在を示唆している。2004年に上映されたこのアニメーション映画の原作は、士郎正宗のマンガ「攻殻機動隊」(英語名*Ghost in the shell* ゴースト・イン・ザ・シェル)。マンガでは、近代産業文化が想定する人間—機械の同等化が最終的に現実になるのではないか、という不安を呼ぶ問いかけがなされている。この問いに映画は肯定しているようでありながら、実はそこには多くの含みを持たせている。なぜなら、設定とストーリーが肯定の方向であっても、人物のセリフおよび画像中には、それをなんらかの形で否定する作家達から引用した表現が多く散りばめられているからだ。

<sup>2</sup>この点については、後ほど取り上げる。

<sup>3</sup>この現実を問う姿勢は、1882年に亡くなったアメリカの著名なSF作家フィリップ・K. ディックの作品に見られる

<sup>4</sup>ゴースト・イン・ザ・シェル*Ghost in the shell*、文字通り、「(甲殻または)殻の中の幽霊」は、要するに超自然的な士郎の人類像を明らかに示している——我々と我々の人工的なコピーを識別するものがあるとすれば、それは「ゴースト」の存在だ。あまりに謎めいた靈魂だが、このふたつの映画の中でも最も重要な役割を担い、劇中のいくつかのパラドックスを解く鍵にもなっている。

この論文の目的は映画の評論ではないので、映画を掘り下げてくどくど解説することに時間を費やそうとは思わない。とはいえ、人間の変化が本来理解できる範囲や受け入れられる範囲をはるかに越えた時、それに対する今の現代文化の不安とは言わないまでも、疑問や懸念をよく表しているという点では、この作品がすぐれた先見の明を持っていると判断して、選ばせてもらった。映画は、近未来に拡大鏡のような効果を持たせて、これらの変化が抱える矛盾をうまく強調している。この矛盾を争点におきながら、話を進めていきたいと思う。

## 人間性抜きの人間

「ゴーレムと人形、人間の模倣」<sup>5</sup>

旧約聖書の詩編139:16にゴーレム(□□□□)の文字が出てくる——「我はゴーレムに過ぎなかった、その我をお前の目が見た」——この単語は不完全な、やりかけの状態を意味する。ゴーレムはすなわち「第二のアダム」のようなものだった。ただし、創ったのは人間という別の創造物だ。人間が創造主にとって代わることが出来ないため、この試みは失敗に終わるよう運命づけられているのだろう……。この神話にはかなり明確なメッセージがこめられている——創造主を真似しようとするものは失敗するだけだ。これは慢心が招いた身の程知らずの真似、神々に対する不遜(hubris)であり、破滅しか招かない。しかも伝説では、ゴーレムは気が触れたようになり、当初の目的だった人間への奉仕より多くの被害をもたらした、とされている。

また、映画のあちこちのシーンで見かける機械式の人形は、18世紀の自動人形やハンス・ベルメールの「人形」(les Poupées, 訳注：球体間接人形や畸形人形)を順に彷彿させる。映画の人形の方は、人間の模倣をさらに違うグロテスクな形で実行している——純粋にメカニカルな原理に基づいて機能し、魔法や超自然的な作用で命を吹き込まれたわけではないのに、態度に至るまで人間そっくりなのだ。そして映画はまさに、似姿が極端になると当の人間がぐらついてしまうことを突いている。「ガイノイド」(gynoïde, 訳注：女性型愛玩用アンドロイド)達が、持ち主の性的な快楽に使われるように……。

ここに至ると、いったいどの時点で崩壊が始まるのか自問したくなる——もし人形ーロボットが人間の行動を、完璧とは行かないまでも模倣するとなると、機械と性行為を持つ人間は、やはり前代未聞の背反を犯すことになる。この背反がきっかけになり、生き物と生きて

---

<sup>5</sup> 劇中では、それとなくラビの伝説に基づいたゴーレムの作り方が示唆されている。バトー(訳注：「攻殻機動隊ゴースト〜」の準主人公でサイボーグ。「イノセンス」の主人公)とその部下が捜査の段階で幻影の館のような場所にたどり着くと、入り口に一体の「人形」を見かける。人形の前にはカードが、ヘブライ語の‘真実’または‘命’の意味を持つ「エメト」(□□□)と、‘死’を意味する「メト」(□□)の言葉を綴るように並べてある。確かにカバラの伝説によると、人間の形を模した存在に命を吹き込むには「エメト」の文字を額に貼らなくてはならない。だが最初の一文字を取ることによって「エメト命」が「メト死」になると、ゴーレムは形を崩して元の粘土の塊に戻る。

いるように見せかけた物、人間と人間のイミテーション、個人とその似姿の製造品、これら  
の間で後にあらゆる混同を許してしまう。

こうなると、やはり人間はゴーレムの時のように、神が自らの姿を「模して」人間を創造  
した行為をもじっていることがよく分かる。この物まね的な側面はとても重要だ。これは、  
本来の現実とそのうち取って代わる可能性を秘めた「第二の現実」と呼べるものを生むこと  
ができる、そんな接し方を現実に対して築く行為なのだ。改めてここに、強烈なバーチャル  
性が抱えるジレンマが見て取れる。あまりにも強烈であるゆえ、基になったものや着想元を  
凌駕するまでになる。まるでこの第二の現実が、完成度と「リアリズム」において本来の現  
実より勝っているかのようだ。生成の順位から考えると、本来の現実に従属する形を取るべ  
きなのに……。映画では、人間が創造した人工的な創造物たちに自立する能力が芽生えたか  
のように見え、創造元とは無関係に自主的に進化するように見える時点で、人間や人間性の  
正統性と信憑性に対して疑いが生じる、という、ループ的な構造が巧みに使われている。

#### 「マリオネットと糸、または無秩序へと降格する空間」

このパラドックスこそは、まさに現代に生きる個人のパラダイムにも存在する——先に述  
べたことをここでも繰り返すようだが、現代の個人は、自分が源と呼ぶものや超越的な基準  
から完全に独立して発展していると信じているか思い込んでいる。完璧な物質主義の発展は、  
科学技術の領域が定義し、範囲を定め、つくり、または変化させた物質的な現実以外には、  
内在的なものも超越的なものも存在し得ないと断言することで、この個々人の姿勢をさらに  
過激にしている。もし、数多くの科学者たちが産業に役立つ範囲でしか実際に世界を認識し  
ていないのならば、これをマンガの様だと思ってしまえるかも知れない。ただやはり何でも  
単純化する主義というものは、信じられないほど暴力的で、そこから見えてくるのは全く絶  
望的な人間の姿だ。その姿に一番近いのが、糸が切れて崩れ落ちたマリオネットのイメージ  
だろう。

マリオネットは糸によって人形遣いに操られている……。もし糸が切られたら、自分を立  
たせ、動かしている者との繋がりを失い、マリオネットは崩れ落ちる。我々は、あらゆるタ  
イプの人形遣い（ここでタイプの定義は問題にならない）の手から逃れられると思い込み、  
ひとりで立ち、自由に動けるものだと思い込んでいる。しかし、実際はそういうわけにはい  
かないようだ。糸は、我々の甘受する自由にならない死と生の象徴。個人より上位にある、  
ある種の存在と我々を超越的に結ぶ絆だ。糸の存在を否定する、あるいは、なくてもやって  
いけると思うこと自体、挑発と絶望の交じった姿勢から来ている。この姿勢は、特にミルチ  
ャ・エリアード、アンナ・アレント、あるいはルネ・ゲノンらが「現代の人間」と称する者  
たちに典型的だ。絶対的な自立という幻想は、いくつかのアポリアの連鎖を招くが、これは

後に部分的に取り上げるとして、その幻想は不条理の入りまじった絶望という、二〇世紀後半に典型的な絶望の形を招く、という代償も払っている。不条理は、逆説的なことに、豊かな国々で、ひとつの知の時代がずっと掲げてきた旗印だった。

空間についてはまだあまり取り上げてこなかったが、これは人間とその本源の間に切れ目を入れた当事者でもあり、傍観者でもある——世界を神聖と見なさなくなった時、人によっては世界の魔法が解けたと言うが、それは混沌とした空間の出現とその未分化の促進という形で表される。この現象には、時の質的な要素——たとえば断片化と細分化が進むコミュニティーライフの再組織化に貢献するお祭りや集団で行う年中行事というもの——がゆっくりと侵蝕されていく現象も伴う。この空間の変貌は不安をそそるものでありながら、実はもっと気がかりな変化を隠している。

「ワインのカップを澱まで飲み干す、または現代の『選択』が出した究極の結論」

確かに、ますます多様化し、規格化の進んだ産業商品が氾濫する現代における物質主義的な個人主義の結果として、世界の標準化のある形がゆっくりだが確実に成熟している。それは特に、日常における科学技術の比重の増加（少なくとも豊かな国では！）によって驚くべきメタファーが生まれても、それらがすぐに平凡なものとして見なされていく点に認められる——とりわけ、人間の存在の中核と見なされる（その点ですでに反論の余地がある）脳をコンピューターにたとえる行為と、関連するイメージの数々などがそれに当てはまる。もしも注意深く観察するなら、このたとえがまったくいい加減なものだと分かるだろう。ただし、それが苦笑いする程度で済まされないのは、生物的存在としての人間を、肉体的な媒体よりずっと安定して信頼できる一種の「人工的な知能」の曖昧な等価物だと捉えるような人間像が慢性的にちらついているからだ……。

バイオロジーの世界に、まるで幻覚のような科学技術とサイバネティックス<sup>6</sup>が出現したことで（少なくとも映画ではそうだ）、肉体的な媒体より安定して信頼出来る一種の「人工的な知能」に、はっきりはしないが相当する生物的存在という人間像の流れが出来た……。生物学の分野に科学技術が登場することで、サイバーパンク（訳注：人体や意識を機械的な生物的に拡張することが普遍化した世界において、個人や集団がより大規模なネットワークに取り込まれた状況を主題とする新しいタイプのSF作品）という流れが生まれた。その産物のひとつとして、『イノセンス』(*Innocence*)があげられる<sup>7</sup>。そこにある希望の不在、オ

<sup>6</sup> この言葉はギリシャ語のクベルネテス *kubernētēs*、導く者、先導者 *pilote* がもとになっている；確かに、映画はこの先導者の役割と本質は何か、と強く問うている。

<sup>7</sup> この包括的な言葉が深く絶望的な側面を見せる未来をよく表している；これは確かにサイバネティックスによる未来だが、1970年代を特徴づけた *no future* 運動に由来していることは言うまでもない。

ーギュスタン・ベルクが「メタバジスム」 (métabasisme、土台・根拠の転換) と呼んだ一種のニヒリズムは残念ながらまだ当分流行しそうだが、それが一見、ヘゲモニーをもっているかのような状態を乗り越える試みは妨げられるものではない。

## 鏡と機械

「混沌の中の未熟な存在、またはロボット」

自動人形の像は、人間の条件の馬鹿らしいほとんど病的ともいえる側面を思い起こさせる。しかし、ここで改めて言うが、これはあらゆる超越性が否定されたか排除された時に働くイメージなのだ。このイメージの機械的な化身がロボットになる。この言葉をそのまま訳すと「奴隷」<sup>8</sup>、つまり一種の人間より格下の召使いになる。これは、その言葉が生まれた産業時代の生産関係の特徴をよく捉えていると同時に、創造主と創造物との従属関係の曖昧さ<sup>9</sup>をもよく捉えている。身体が機械として理解されるのだから、当然、人間を構成するあらゆるものが機械化の対象になる可能性から逃れられない——技術は形而上学に簡単に取って代わり、たとえ形而上学があがいても、最終的にはナノテクノロジーやバイオテクノロジー、その他画期的な遺伝子の学問に魅了された二〇世紀末の魔法使いの卵達が思い描く「超人」(transhumains、訳注：科学技術を用いて肉体と認識能力を進化させた人間) や「ポストヒューマン」(post-humans、訳注：過激な人間強化と自然な人類の進化の組み合わせによる未来の人種) という空想の存在の前に屈するしかなくなる。

このような身体の捉え方では、身体の装置も、人間をその他の環境とさらに具体的に繋げるには決して至らない、内の世界と外の世界を繋げることが精一杯のところに着着する。技術の進歩そのものが人間の存在の排除を決定的にすると、次にサイバーテクノロジーの発展が、人間の条件に対するより広い、深いもしくは複雑な見方を弾圧してしまう。

もうひとつのメタファーは、機械の発明とその卓越性から生まれたもので、これまたなんとも力強い「消耗」(usure) という言葉だ。従来の医学は、しばしば人の身体を体液と臓器と機能の集まりとして認識して、それもエンジンのパーツのように取り替える部分をどんどん増やしていけると思っている。機械工学はまさに生物学の先を行っている。生物力学<sup>10</sup>というものが取り沙汰されるくらいだ。しかし、物事を本来の場所に戻す為に、少し遠回りして元になったギリシャ語の意味を知る必要がある……「メカネ」(Mékhanê) は技巧、発明を意

<sup>8</sup> チェコの作家カレル・チャペック Karel Čapek が 1920 年頃に作った言葉より

<sup>9</sup> これに関しては、1818年に発行されたメアリー・シェリー Mary Shelley の小説「フランケンシュタイン、あるいは現代のプロメシユース」 *Frankenstein, ou le Prométhée moderne* が、創造物が創造主に対して抱く幻惑、それと同時に自分の存在意義を見つけることが出来ないまま、慢心や身勝手な好奇心から作ったと言うこと以外に何故自分を作ったのか説明できない創造主に対して言葉に言い表せない憎しみを覚える様子を、非常にうまく描写している……

<sup>10</sup> この表現は 1898 年頃にフランス語で登場する

味する。つまり、作られたものを表す。人間という存在を描き、定義して説明するために、どうして人間が根本的に由来するものではなく、人間の手によって作られたものを見本にしたのだろうか？

それは、「機械」(machine) のイメージがあまりに素晴らしく、力強い為、古典時代からすでにひとつのルーツ、指標として捉えられてきたのかも知れない。我々の身体と心理の基準として……。こうして、論理をあてもなく奇妙にさまよわせた結果、我々は身体の奥の混沌とした次元に入り込む。そこは、人間という存在が未熟なレプリカのために迷い込んだ、明確な境界を持たない漠然としたテリトリーだ。これは確かに神話の分野だ。要するに、「先験的」(a priori) に真実だと思われているので、誰も改めて問題に出来ない、ひとつの真実の形なのだ。どんなに信じられなくとも、この捉え方からなる現実の「形態」(version)こそ、我々の世界観の手本になっている。例えその捉え方が常軌を逸して、完全にウソの世界を見せていようとも。

#### 「不安にさせる対面」

いうまでもなく、われわれの創造物と面とむかうと、そこに自分の有限性が映り、弱くて不完全で滑稽な自分の外見を確認することになるので、不安な気持ちになる。『イノセンス』(Innocence) がこの対面を何度も設定しているのも、冷たさが浮き彫りになる希望のない世界を体験させることが目的だからだ。一八世紀の解剖学用の蠟人形が人体内の「専門的」な機能を披露しながら、より微細な身体性の部分を忘れさせたように、二〇世紀のサイバネティクスは全体化を実行する専門的な文化の台頭を許した。この文化は人の生き方のほぼ全ての側面をひとくくりにし、ひとくくりに出来ないものには関心を持つ必要も、また実際にも必要でないと信じ込ませ、そのまま脇に置いておく。

ポール・ロワイヤル論理学(*La logique de Port Royal*)<sup>11</sup> は、論理がより沢山考えさせてくれるのか、よりうまく考えさせてくれるのかを問うていた——サイバネティクスが問うのは、機械による人間の似姿が我々の現身の姿の人工補整器にとどまるのか、それとも我々を越えることになるかだ。越えるとなると、「結果的に」(ipso facto)人間が世界に対するある種の倫理に基づいた姿勢ではなく、一連のパフォーマンスや性能で定義されることになる。この場合「魂の死」は、さらに広義の意味で人間に死刑判決を下すものになる。というのも、人間が自らの創造物と対峙した時、自らの特殊性を全く明示できなくなるので、自分を代替可能なものとし、名づけられてはいないが人間をベースにした存在、または人間らしい何かに取って代わられる廃棄物にしてしまう。

---

<sup>11</sup> アントワーン・アルノー Antoine Arnauld とピエール・ニコル Pierre Nicole が 1662 年に出版した。

「機械仕掛けが生へ帰還する矛盾」

映画がそう思わせるように、機械仕掛けの存在が生き物の世界に入り込み、その代わりに務めてしまうくらいになる事態は、中世末期から始まった長いプロセスの究極の終着点である。これは人間をじわじわと機械人間へと変えていき、次に機械の単なる交代要員に仕立て、ついに最後は不安を内に抱えながら個人主義に徹する技術化された存在にしてしまう。完全な個人主義というのは、どのような集団や組織の上位の命令系統からも自らを任意で切り離すからだ。

これは一見、決定的なアポリアのようだ——現代科学の興隆は人間の完全なる解放を約束していたはずなのに、全く逆の結果に辿りついたのだ。つまり、人間からあらゆる感情が抜け落ち、良心と自覚が衰弱し、漫画のように歪められた不完全な形となり、人間は人間性を失うような、ある種の監禁状態に落とされたのだ。全体を成す要素の合計が全体の数と一致しないというおなじみの明言は、逆に、全体を成す要素の合計が全体の数と一致すると明言する、もっとやさしい算術的見解のせいで忘れられてしまったかのようだ。その場合、人間の自由は、サイバネティックスの形態をとるものの等価物として代替可能な生物的機能の集合体の内にかき消される。包括的で冷たい医学の幻想の世界で。

もし、この等価性が完全なら、我々の存在は完全に消えて無くなるだろう。とはいえ、他の捉え方が存在する。異端かもしれないが、高い知的妥当性を持ち、かつ従来の合理性を越える神聖観念と霊性という、実際に全く異なる分野に属するものの捉え方だ。

## 永続性、継承と継続性

「小宇宙と大宇宙」

従来の科学的アプローチは、これから問題にすることを、ごく部分的にしか解釈できないか、破壊しない限り解明できない。生物学者が研究対象とする生き物を——実際は生きた状態が大切なものにも関わらず——殺さなくてはならないのと同じように。しかしながら、先に述べたような永久に行きづまったように見える事態に対しても、実は、それにとって代わる捉え方が存在する。ただし、それは従来の知的な論証の領域、つまり根底のところ現代のものと同じ制約に縛られている論証の領域では、そのままの状態を受け入れられない捉え方である。

小宇宙と大宇宙という古い概念は、人間と宇宙を鏡の向こう側に写る互いの姿をむかいあわせるようなものだが、そこには単なる複製を求める思考ではなく、類似性や創造的な模倣を目指す思考プロセスがある。つまり、概念は一種の競争意識をもたらすにしても、この場合の類似性は、可逆的なものであるため、反映元に墮落が起きない。別の言い方をすれば、

人間が宇宙を反映すると同じように宇宙が人間を反映すると強く断言できる。この類似性のプロセスは、超越性(transcendence)と内在性(immanence)の反映にも、それを納得しえた時点で機能する。「向こう側の世界」とはいうもの、実際には人間に内在し、その自尊心と存在意義をつくり、与える第三の境界のことであり、その反映を納得した時点で、機能するのだ。

不安を招くとしてきた人間と（非）人間的な機械の対面は、ふたつの他者性とふたつの無限大——世界と人の無限大、あるいは創造物とその創造主の無限大——を生産的に照合するかたちにとって代わる。こうして反映の概念は、自分より外にあり同時に自分の内にある源に対して、比較と回帰を可能にするゆえに、肯定的なものになる。

### 「伝統の概念」

従って、もし、継承というものがあるとするなら、それは単なる一個人の次元を越えて永久的な共同性の次元にとどめられうる、知識のサポートという意味で、あるだろう。この伝統の概念は理解されることがあまりにも少ないが、産業時代以前の人の集団の中に、ほぼ間違いなく確認することが出来る。そして、伝統が築いた世界観やその関わりを我々がとても理解し難いのは、機械的で物質的な世界観とは相容れない超自然現象を受け入れる要素が伝統のうちにあるからだ。もう一度言うが、世界をひとつの機械に縮小することは、幾多もある小宇宙と大宇宙の類似性を潰し、我々をある退廃した現実の形に囚えてしまうことになるのだ<sup>12</sup>。

ここで、空間が、我々の人格と密接に関わる積極的な環境として介入する。なくてはならない仲介者として明確な資質を与えられ、ほとんど全ての個人や集団の行為の集積先と型の役割を持つ——この感情的とも呼べる空間を介して、最も重大な社会文化的な現象のほぼ全てが発信され表現される。この観点から、アンリ・ラボリ<sup>13</sup>の研究は、個人の一連の行動はある種の共同体の枠を越えることなく、その共同体に個人が提供したものを残された者に継承され、維持される能力をもつと述べ、個人は死なないという観念をはっきりと強調している。

### 「現実」

---

<sup>12</sup> 実は西洋の秘教的な伝統は、昔から完全で平静な人間像や世界観を提案していた。これは大きな宗教が提供できるものよりもずっと東洋の解釈と一致していた。カバラkabbale、錬金術alchimieまたは錬金秘法hermétismeもそうだ。参照：秘教主義批評事典Dictionnaire critique de l'ésotérisme、ジャン・セルヴィエ編集Jean Servier、P.U.F.出版、パリ1998

<sup>13</sup> アンリ・ラボリHenri Laborit、*逃避の称賛 Éloge de la fuite*、Robert Laffont出版、パリ1976；章のタイトルは「死」

結局のところ、人間についての伝統的なヴィジョンが示してくれる現実というものの解釈の仕方を手がかりにして、多くのアポリアを乗り越えることが出来るし、多くの行き止まりから脱出することが出来るのだが、そうすることは、確実に、たっぷり二世紀も前から築かれてきた今日の現実の解釈の仕方を深く再検討することにもなる。錬金術のしきたりを通して、例えば東洋と西洋を結びつけることが出来る。というのも、昔の道教が純粋な錬金術のやり方を知っていたのと同じように、西洋の錬金術は物質と精神、生と死、救済と解放の境界を取り除く精神的な達成を示している。究極の現実の追求には、我々のよく知っている形の空間と時間の枠を越えることも必要だ。その場合、人間としての個人は、高みにある究極の現実——自分の内で実現しなくては辿り着くことが出来ない現実——の記号とその反映物になる。すると、宇宙の完全な理解を得ようとするなら、身体と世界の境界は木っ端みじんに砕けることが分かる……。そこで、神道に考えをおよぼすことが出来る。そのように見るなら、映画の最初から最後まで、まるで透かし細工のような形で描かれる「ゴースト」は、絶対に、そして永久に「生きている」(vivant)とされる世界と人間の間を橋渡しする、巧妙な繋がりになる。

このような世界観が何度も取り上げられ、そして今日でも取り上げる対象になっていることは、とても注目すべきことだ——厳格に物質的な世界観とは逆に、あの類の伝統的な教義は何千年もの間、有効と見なされてきた逃げ道を提供している。しかし、このように考察をはじめると、従来の大学の教義からはみ出し、全く異なる考え方へと進んでしまうことは確実だ<sup>14</sup>。

### 結論：表意と媒介の力域としての空間

こうなると空間は、我々が認識している本来の形をさらに越えた形に到達する。感情を媒介し、様々な情動に資質を与えられた空間は、記号の運び手となり、また自らも記号になる。いや、記号という範囲を越えて象徴のレベルに達する。そして、この象徴こそ、人間性の特徴として捉えられるというだけでなく、人間性とそれを超越するものの典型的な媒介でもあるのだ。

---

<sup>14</sup> 純粋な知性・理解力ではなく、「純粋な知的直観」*intuition intellectuelle pure*を参照するものの考え方。この論理はルネ・ゲノンがより専門的に著書で扱っている。